銭形平次捕物控

槍の折れ

野村胡堂

青空文庫

一

「八、何處の歸りだ。朝つぱらから、大層遠走りした樣子ぢやないか」

錢形の平次は斯んな調子でガラツ八の八五郎を迎へました。

「わかりますかえ親分、向柳原の叔母の家から來たのぢやないつてことが」

八五郎の鼻はキナ臭く蠢めきます。

「まだ巳刻前だよ、良い兄さんが髷節に埃りを附けて歩く時刻ぢやないよ。それに氣組が大變ぢやないか。叔母さんとこの味噌汁や煮豆ぢや、そんな彈みがつくわけはねえ」

「まるで廣小路に陣を布いてゐる八卦屋だね」

「それとも千住か板橋から馬でも曳いて來たのか」

「冗談ぢやありませんよ、親分。二年前に死んだ人間が人を殺したんだ。小石川の陸尺町から一足飛びに飛んで來ましたぜ」

「二年前に死んだ人間が人を殺した？」

「その上まだ〳〵四五人は殺してやるといふんだから大變で――」

「誰がそんな事を言ふんだ？」

「二年前に殺された人間ですよ」

「さア解らねえ、まア落着いて話せ」

「落着いて聽いて下さいよ親分、こいつは前代未聞だ」

ガラツ八の持つて來た話は、あまりにも桁外れでした。二年前に死んだ人間が、豫告して人を殺すといふことは、絶對にあり得べからざる事件を見て來たといふのです。

「小石川陸尺町（安藤坂下――今の水道町）の成瀬屋總右衞門といふのを親分は覺えてゐるでせうね」

「陸尺町の成瀬屋總右衞門――二三年前に御府内を騒がせた大泥棒蝙蝠冠兵衞を生捕つて、お上から御褒美を頂いた家だね」

平次はよく知つて居りました。その頃義賊と稱した泥棒で、その實、百兩盜つて、十兩か五兩を貧しい者に惠み、あとの大部分は自分の懐ろに入れた蝙蝠冠兵衞は、自分の良心を欺いて、無智な世間の人氣を博することと、如何なる締りも、なんの苦もなく開けて忍び込む天才的な術を心得てゐる點で、有名だつた男です。

その蝙蝠冠兵衞ほどの強か者も、傳通院前の成瀬屋に忍び込んだ時は、取返しのつかぬ失策をしてしまひました。

小石川切つての大地主で、巨萬の富を積んでゐる成瀬屋は、蝙蝠冠兵衞に狙はれると知つて、屋敷の内外に鳴子を張り渡した上、幾つも〳〵罠を仕掛けて、苦もなく忍び込んだ巨盜冠兵衞を生捕りにし、番頭で用心棒を兼ねた傳六といふ男が、散々冠兵衞をなぶりものにした揚句、半死半生のまゝ役人に引渡したのでした。

蝙蝠冠兵衞は間もなく鈴ヶ森で獄門になりました。生前の善根らしきもののお蔭で、助命の歎願などもありましたが、素よりそんなものは取上げられる筈もなく、一代の巨盜もそれつ切り江戸つ子の關心から拭ひ去られてしまつたのです。

「――その成瀬屋總右衞門の家へ、二年前に御處刑になつた蝙蝠冠兵衞が祟るんだから變ぢやありませんか」

「待つてくれ、そいつは捕物ぢやなくて怪談だぜ、八」

平次は恐ろしく酢つぱい顔をしました。

「その怪談が大變なんで、一と月も前から成瀬屋の一家を鏖殺にするといふ蝙蝠冠兵衛の手紙が三本も來てゐるぢやありませんか」
「よくある術だ」
「ところが、到頭やりましたよ、親分」
「――」
「成瀬屋の用心棒――腕自慢の力自慢で、その上恐ろしく氣の強い番頭の傳六が、見事に芋刺しになりましたよ」
「殺されたといふのか」
「寢てゐる心の臟をたつた一と突きだ。グウとも言はずにやられたらしいんで」
「お前見て來たのか」
「恐ろしい手際だ。行つて見ませんか親分」
八五郎が舌を振るつて驚いてゐるのです。
「よし行つて見よう。幽靈を縛るのも洒落て居るだらう。案内してくれ」
「有難い、親分が動き出しや百人力だ。ところで此の儘ぢやあつしの方が動けませんよ」
「どうしたんだ」
「まだ朝飯にあり付かないんで、――あわてて飛出したが、空つ腹に小石川は遠過ぎましたよ」
「馬鹿だなア」
八五郎の爲に遲い朝飯の用意をする女房のお靜の後ろ姿を見乍ら平次は苦笑しました。

二

陸尺町の成瀬屋へ行つたのは、もう晝近い頃、檢屍萬端濟んでしまつて、お葬ひの支度に忙しい有樣でした。
店の人達の白い眼の中に、土地の御用聞金富の留吉だけは、ホツとした顏で迎へてくれます。
「錢形の親分が來てくれさへすれば、亡靈も退散するだらう。こいつはどうも、あつしの手に了へさうもない」
若い留吉は、よく己れを知つて居ります。
「どうしたんだ、金富町の兄哥らしくもない。昔から下手人に足のなかつた例しはないよ」
平次ははなつからこれを生きて居る人間の仕業と見拔いてゐる樣子です。
「だが、こいつは人間業ぢやないぜ。戸締りは傳馬町の大牢のやうに嚴重だ、開いて居るのはお勝手の引窓がたつた一つ。そんなところから出入りするのは、烟と風だけだ」
「まア、見せて貰はう」
成瀬屋といふのは、山の手きつての大地主で、此の邊一帶、旗本御家人の屋敷でなければ、成瀬屋の持地と言つても大した間違ひのないほどでした。
主人の總右額門は五十七八の典型的な大旦那、鬢の霜ほど世を經た、なんとなく拔目のないうちにも、人を外らさぬ愛嬌と、自然に備はる品位のある中老人です。
「これは〳〵錢形の親分、飛んだお騷がせをいたします。――大泥棒を縛つて、御上の御手傳ひをして、その泥棒に崇られたとあつちや、私も人樣へ顏が合はされません。何分宜しく御願ひ申します」

かう言つた態度で平次と八五郎に接してくれました。

成瀬屋の構へは、噂に聽いたよりも宏大で、近頃は庭に張り繞らした鳴子や罠は取拂ひましたが、戸締りの嚴重さと、奉公人の腕つ節の強さは、留吉が傳馬町の大牢と形容したのが、全く適切過ぎて滑稽な位でした。

番頭の傳六が殺されてゐたのは、店の次の間、大錢箱の前で、晝は恐ろしく薄暗いところですが、奥と店とお勝手との要衝で、支配人が頑張るには、一番都合の良い場所です。

通路は三方にある外に、此の部屋から梯子で店二階へ登れるやうになり、二階の手摺から見下す形になります。尤も二階と言つても物置同樣で、誰も寢起きはして居りません。二三年前までは、奉公人の寢部屋だつたのですが、傳六は夜半に便所に起きる奉公人達をうるさがつて、裏の離室に引越させ、その代り日用の雜器を詰め込ませて置いたのです。

「此處でかう寢て居るところをやられたんだが、——蒸し暑い晩で、胸まで拔け出して寢て居たにしても、寢卷の上から、槍の折れで一と突きに、布團へ通るほどやつたんだから恐ろしい力だ」

留吉は説明してくれました。六疊はまだ掃除が濟まなかつたものか、斑々たる血潮で、昨夜の慘劇がよく解ります。人間の通路を避けて、梯子段の下寄りに寢た傳六を、たつた一と突きで、聲も立てさせずにやつたのは、餘つ程の力と手際がなければなりません。

平次は其の部屋を中心に、店へ、奥へ、お勝手へと探索の手を伸ばして行きました。

お勝手は田舍の臺所ほどの廣さで、締りは恐ろしく嚴重ですが、引窓が引き忘れたやうに開いて居ります。牢屋のやうな締め切られた家で、此處だけ開いて居たのは、『此處から入りました』と言ふ證據のやうで、少し變でないこともありません。

外へ廻つて見ると、此の間の嵐の後で、屋根の漏を見た時の梯子が、その儘お勝手の横に掛けてあります。これも『此處から入りました』の證據の一つです。

多勢の奉公人は、皆んな離室に寢る中で、殺された傳六と、下女のお大だけは母屋に寢るさうで、お勝手の締りはそのお大の役目でした。

「昨夜引き窓を閉め忘れたんぢやないか」

平次は矢張りかう訊く外はなかつたのです。

「飛んでもない、親分さん。私は二度も戸締りを見てから休みましたよ」

三十がらみの働きものらしいお大は、躍起となつて辯解します。

傳六の死骸は、殺された部屋の次の間に、傷口に繃帶だけ卷いて移してありました。平次はいつもの愼しみ深い熊度で——その癖恐ろしく念入りに調べましたが、顔の表情など至つて穩かで、なんの苦悶の跡も留めず、傷は左の乳の下を一と突きだけ、いかにも鮮かな手際です。

凶器は恐ろしく變つて居りました。それは三尺ほどの柄を殘した、笹穗の手槍の折れ。

「フ——ム、こいつは恐ろしい道具だ」

平次はその斑々たる手槍の折れを眺めて居ります。

「そいつは二階の長押にあつたんだ。まだいろ〳〵な道具があるのに、それを選り出したのは變ぢやないか」

留吉も凶器の特異性には氣が付いた樣子です。

「二階を見ようぢやないか」

平次は先に立つて、店二階へ登りました。ガラクタと言つても大家で、膳椀も布團も立派に使へるものばかり。土藏へ行くのが面倒で、日用の雜器を此處へ入れて置くのでせう。その中に一つ、古い刀箪笥があつて、中には長いの短いの、いろ〳〵の得物を取揃へてありますが、曲者がそんなものには眼もくれず、長押に埃を被つたまゝ掛け捨ててあつた槍の折れを持出したのでせう。

外に滿足な槍が三筋、弓が二た張、矢が二三十本、これ等はすべて、昔の豪族が、家の子郎黨の手で自分の家を護つた時の遺風らしく、何時でも取出せるやうに用意してあつたのでせう。尤も槍は悉く鞘をかぶせ、弓は二た張とも弦を外してあります。

二階を見て居るところへ、主人の弟で豊次郎といふ中年者が入つて來ました。腰の低い四十五六の男で、平次が望むまゝに、いろ〳〵のことを説明もし、戸締りの具合なども見せてくれました。二階の戸締りも嚴重以上で、豊次郎に言はせると、掃除の時開けるだけ、それに恐ろしく嚴乘な格子があつて、外から入ることなどは思ひも寄りません。

三

傳六の殺された部屋は、四通八達の要路で、何處からでも入れますが、武藝自慢で、恐ろしく眼ざとい傳六が、二階から槍の折れを持出して來て、胸に突立てられるのを知らずに居るとは思はれず、下手人はどうして凶器を持出したか、どうして傳六に近づいたか、それが一番興味のある疑問です。

「灯は點いて居たんだね」

「ヘエ――、有明の行燈が、今朝まで點いて居りました」

豊次郎は平次のために、行燈の位置まで指してくれます。

母屋に寢るのは、此の外に主人總右衞門と女房のお早と侔の島三郎と、娘のお芳と、親類の娘のお町と、たつたそれだけ、この顔觸の中に、強か者の傳六を殺せさうなものは一人もありません。

お早は主人とは少し年齡が違ひ過ぎる位で、四十そこ〳〵の女。板橋在の百姓の出で、正直者らしい代り、慾は深さうです。これは何を訊いても一向要領を得ません。

侔の島三郎は二十歳、少しは帳場も手傳ひますが、これは氣も弱さうで、人などを殺せさうもありません。その妹のお芳は十八の恐ろしく色つぽい豊滿な娘。兄の島三郎とは反對に、氣力も健康も溢れて居りますが、傳六とはなんの關係がある筈もなく、もう一人親類の娘といふお町は、日蔭の花のやうな二十二三の美しい女ですが、一年の半分は床の上に居る病弱で、現にこの一と月ばかりは、持病の癆咳が重くなつて、三度の食事も床の上に運ばせて居ります。

「矢張り外から入つたんだね」

留吉はさう極めて居ります。

「いや、金富町の親分の前だか、あの引窓を外から開けて入れる道理はない。あつしは下手人は内の者だと思ふが――」

ガラツ八は柄にもない抗議を持出しました。

「家の者なら、もう少し人間の入れさうな場所を拵へて置くぜ」

「――」

留吉の言ふのは尤も至極でした。下手人が若し家の中の者だとすると、外から入れさうもない引窓などを開けて置くより、お勝手口

なり縁側なりに、外から入つたやうな細工をして、雨戸の一枚くらゐは開けて置くべき筈です。

「それに曲者は、昨夜戸締りをする前――夜のうちにそつと潜り込んでゐる術もあるぜ」

「逃げる時は、あの引窓から出たといふのか」

ガラツ八、大きく開いたまゝの引窓を見上げました。

「そんなことは御座いません。戸は明るいうちに締めてしまひますし、寝る前には私か傳六が、家中を見廻ります」

主人にさう言はれるとそれ迄です。ガラツ八や留吉の世帶と違つて、金持にはまた金持らしい、神經質な用心のあることを、二人もよく心得て居るのでした。

「引窓は閉つてゐても、外から入れないことはないよ」

今まで默つて彼方此方を調べて居た平次は、斯んなことを言ひ乍ら皆んなの前に顏を出しました。

「縁の下は駄目だぜ、錢形の」

先刻散々縁の下を覗いて歩いた留吉は、苦笑ひをして居ります。彼の頭は蜘蛛の巢だらけだつたのです。

「縁の下ぢやない。――引窓から入れると思ふんだ。八、其處を締めてくれ」

「外から開けるんですか、親分」

「手加減なんかしちやいけないぜ、確り締めてくれ」

引窓の綱を絞つて、嚴重に結ぶのを見て、平次は外へ出て行きました。

間もなく、お勝手の横に掛けてあつた梯子を登つて、平次は屋根の上に立つた樣子です。引窓は外からキシみます。平次は何やら隙間に差し込んで、その隙間を少しづつ少しづつ大きくして居ります

嚴重に結へたやうでも、引窓の綱にはかなりの弛みがあり、上からコジられる毎に、隙間は少しづつ大きくなつて行きました。やがて其の隙間からスルスルと伸びて來た鳶口が一梃、ガラツ八が念入りに縛つた引窓の綱の――土竈の上の折釘のところの――結び目に引つ掛かると、なんの苦もなく解いてしまつたのです。

引窓はサツと開いて、平次の笑つた顏が、大空を背景に頭の上に現はれました。

「あツ」

驚く人々の前に、引窓の綱を傳はつた平次は、なんの造作もなく輕々と飛降りて居たのです。

「矢張り此處から?」

「いや、これも一つの術だ。――が、此處ぢやあるまいよ」

「?」

平次はこの素晴らしい發見を忘れてしまつたやうに、クルリと踵を返しました。

四

平次の仕事はひとわたり家の内外を見ると、次には死んだ巨盜蝙蝠冠兵衞の脅迫狀を見せて貰ふことでした。

「そいつは主人が預つて居る。先刻檢屍の時、同心の内藤さんが眼を通して、後で取りに來るからと、主人に返した筈だ」

留吉に言はれて、主人の部屋に通ると、

「その手紙は此處に御座いますよ」

主人は氣輕に立つて棚の上の手箱を開けました。

「あツ」

立ち縮んだも道理、手箱の中には一と掴みの灰だけ。確か其處へ入れた筈の、巨盜の手紙三本は、煙の如く消えてしまつたのです。

「どうした」

留吉も八五郎も覗きました。

「無い。——確かに此處へ入れた筈だが、なくなつてしまひましたよ」

分別者らしい總右衞門も、さすがに顏色を變へます。

「そんな筈はあるまい」

「でも此の通り、箱は空つぽになつて、灰がひと握り——」

錢形平次はその騷ぎを後ろに聽いて、そつと廊下に出ました。店の方には奉公人や近所の衆が、多勢で騷いで居りますが、此處はひつそりと靜まり返つて、廊下にも庭にも人影はなく、少しばかりの植込を隔てて、恐ろしく高い塀が、物々しい忍び返しを見せて突つ立つて居ります。

平次は遠慮もなく次の部屋の障子をサツと開けました。

「あツ」

物に脅えたやうに、思はず立ち上がつたのは十七八の娘、見る人によつては隨分美しいとも言ふでせう。脂肪質の豊滿な肉體と、娘々したあどけなさが妙に人を引付けます。

「お嬢さん、ちよいと見せて下さい」

平次はざつと部屋の中を見廻して、父親の部屋に通ずる堺の唐紙などを動かしたりして居ります。部屋の中には鏡臺が一つ、火鉢が一つ、針箱が一つ。あとには何んにもありません。

「あの——」

娘は何やら物言ひた氣ですが、何に脅えたか、又口を緘してしまひました。

「お嬢さん、なにか知つてることがあつたら言つて下さい」

平次はそれへ誘ひをかけましたが、一度緘された娘の唇は、容易に開きさうもありません。

娘の部屋の隣は納戸で、納戸の先は暗い四疊半。其處に親類の娘といふお町が、長い癆咳を患つて寢て居るのでした。

「御免よ——」

スツと不遠慮に入つた平次。部屋の中の藥臭いのに、さすがに顏を反けました。

「——」

默つて見上げた病人の眼は、不思議に活々と光つて居ります。

二十三といふにしては少し老けて、病苦のやつれが頰を刻んで居りますが、蒼白い顏は名工の鑿の跡が匂ふやう。赤い唇も、少し殺げた頤も、異樣な上品さをさへ添へるのでした。

「どうだ、氣分は？」

「有難う御座います。此の通りで、皆さんに御心配をかけて居ります」

痛々しく伏せた眉、※たけく霞むのも不思議な魅力でした。

「ちよいと脈を見せてくれ。——いや右ぢやない左だ」

平次は病人の枕元に蹲むと、柄にもなく脈などを取りました。痩せてはゐるが美しい腕です。

「ヘエ——、親分が脈を診るんですか」

ヌツと顏を出したのはガラツ八でした。

「默つて居ろ、醫者や易者の心得もなきや御用は勤まらないぞ」
「へ――ツ」
八五郎は引つ込みのつかない様子で突つ立ちました。苦笑ひを殺した唇は歪みます。
「ところで、お前は此處の主人と、どういふ關り合ひになるんだ」
平次は娘の枕元に坐り込んでしまひました。
「――私は、あの、先代の成瀬屋の血統の者で御座います」
「ホ――ツ」
變な聲を出したのはガラツ八です。
「成瀬屋の先代が身代限りをしさうになつたのを、遠縁の今の主人が入つて立て直し、私は孤兒になつてさるお屋敷に奉公して居たのを、此處に引取られて育てられました」
お町の調子は淡々としてなんの抑揚もありません。
「皆んなはお前によくしてくれるか」
「それはもう、三年越し患つて居る私を、こんなにお世話して下さいます。なんの不自由も御座いません。勿體ないほどで」
お町は枕の上に顏を伏せて、何やら念じてゐる様子です。
「主人はどうだ」
「あんな良い方は御座いません。慈悲深い、思ひやりのある方で、町内でも評判で御座います」
それは平次も聽いて居りました。善根を積むより外に餘念のない成瀬屋總右衞門の評判は、神田あたりまでも響いて居たのです。
「子供達は？」
「島三郎さんはお店の方が忙しい様で、――よく働きます。お芳さんは本當に良い方で」
「お神さんはどうだ」
「正直一途の方で御座います」
これは大した褒めやうもなかつたのでせう。兎にも角にも、成瀬屋の家族に對する、お町の感謝と好意には疑ひもありません。

五

巨盜の幽靈の手紙は、明かに紛失しましたが、幸ひ總右衞門が文句を暗んじて居るのと、留吉が筆跡や紙をよく見て置いたので、大體のことは平次にも想像がつきます。
手紙は三本とも、外から店に投げ込まれたもので、いづれも半紙を八つに疊んで結んだもの。中はかなりの達筆で、『二年前生捕られて散々なぶりものにされた上、役人に引渡された怨みを陳べ、此の妄執を晴らすため、成瀬屋の者を一人々々、殘らず殺してやる』と言つた凄じいことが、少しくどい調子で書いてあるのです。
「筆跡は？」
「堅い字でした。今時あんな事を書く者は滅多にありません。女子供やお店者の筆跡ぢや御座いません」
總右衞門は言ふのです。
「紙は？」
「唯の半紙だ。――何處でも賣つて居る」
留吉が應へます。
「店へ投り込むのは、どんな時だ」
「朝早くか、夕方――薄暗くなつてからで御座います。誰か氣が付いて拾ひましたが、投り込んだ者の姿は見たものも御座いません」

「御主人の弟――豊次郎さんとか言つたね、あれは本當の弟ぢやあるまいね」
「義理の弟で御座いますよ。私の先妻の弟で」
「子供さん達は」
「皆んな本當の子で御座います。今の家内の生んだのばかりで、――伜はよく店を手傳つてくれますが、娘は唯もう我儘を言ふばかりで」
その我儘が可愛くてたまらない様子です。
「誰かに怨まれて居る覺えはないだらうか、金のこと、縁談のこと、公事、揉事など――」
「なんにも御座いません。金も少しは融通して居りますし、土地も家も人様に貸して居りますが、無理な取立てはいたしません。縁談もまだ決つた口がないので、心配して居ります」
「あのお町――といふ娘は？」
「この成瀬屋の先代の娘で御座います。成瀬屋が沒落したとき、少しの縁故をたどつて、さる大名屋敷に奉公に出て居りましたが、五年前私が引取りました。先代への義理で御座います。精一杯の養生はさせて居りますが、何分あの通りの病氣で、その上遠慮深い性で、思ふやうになりません。町内の本道（内科醫）は病氣は大した事はない、氣の持ちやうでは丈夫な身體になれると申しますが、本人は氣が挫けて、寢たり起きたりでは、弱る一方で御座います」
總右衛門の言葉には少しの暗い影もありません。
平次も八五郎も留吉も、突つ放されたやうな心持で、庭先に顏をあつめました。此處からは小石川牛込一帶の低地を眺めて、なか〳〵の景色ですが、そんなものは素より眼にも入らず、巨盜蝙蝠冠兵衛の亡靈だけが、三人の胸の中に、次第に現實味を帶びて生長して行くのです。
「親分、あの娘が變ぢやありませんか」
「誰だ」
「お町とかいふ、病人の――」
「――」
「親分は脈なんか見たでせう、掌に灰が附いてやしませんか」
「大笑ひさ、あの娘の掌に灰が附いて居さへすれば、物事は一ぺんに片付くよ。ところがそんなものはないよ、嘗めたやうに綺麗だ。右と左と念入りに見たんだから間違ひはない」
平次は醫者の眞似などをした間の惡さに、一人で苦笑ひをして居ります。
「お芳の方は」
「これも綺麗だ――が、綺麗過ぎたよ、洗つたばかりなんだ」
「洗つたばかり？　あの娘の部屋を搜しませうか、三本の手紙は何處かに隱してあるに違ひない」
「止せ〳〵。手を洗ふ隙がありや、三本の手紙くらゐは何處へでも隱せる。若い娘に手荒なことをするでもあるまい。それよりお前は念入りにあの娘を見張つて居るが宜い。きつと何か變つたことがある」
「此處に泊り込んでですか、親分」
「俺から主人へさう言つてやらう。脅え切つて居るから、喜んで泊めるだらうよ」
それは平次の豫想通りでした。蝙蝠冠兵衛の脅迫はまだ果たされたわけでなく、此の上の用心にガラツ八が泊つてくれるのは、成瀬

屋に取つては此の上もない心丈夫なことだつたのです。

六

「親分、なんにも變つたことはありませんよ」

ぼんやり八五郎が歸つて來たのは、それから五日も經つた後でした。

「ところが此方には變つたことがあるよ」

「何です、親分」

「蝙蝠冠兵衞の伜が捕まつたよ」

「ヘエ――」

「幸吉と言つて、こいつは親に似ぬ堅い男だ。淺草で小商ひをしてゐるのを手繰つて、二日前に金富町の留吉兄哥が擧げて來たよ」

「それで、矢つ張り成瀨屋の引窓から忍込んだのはその野郎で――」

「それが分らないのさ。留吉兄哥はさう決めて居るやうだ。が、幸吉はあの晩女房と一緒に家に居たといふんだ。女房と一緒ぢや信用が出來ないと留吉兄哥は言ふが、どうも嘘らしくないところもある。――それに、外から曲者が入つたとすれば、二階の長押からわざ〳〵槍の折れなんか取出したわけが分らなくなる」

平次はすつかり考へ込んでしまひました。その時――。

「お手紙ですよ」

二人の沈思を破つて、平次の女房のお靜は顏を出します。襷を外して、手紙を取つて、輕く八五郎に目禮し乍ら、何時までも若くて美しいお靜の濡れた手には、結び文が一つ。

「何處で、それを」

「井戸端へ小僧さんが持つて來ましたよ。十四五の、それは可愛らしい」

「八」

「よし」

八五郎は飛んで出ましたが、其の邊にはもう小僧の姿の見える筈もなく、野良犬を蹴飛ばして、張板を二三枚倒して、八五郎はぼんやり戻つて來ました。

「見えませんよ、親分」

「まア宜い、どうせお前に捕まるやうなどぢやあるまい」

「どぢの中だから、あつしのやうなどぢにも捕まるだらうと思ひましたよ」

「洒落を言ふな、馬鹿々々しい」

平次は手紙を開きました。何の特色もない半紙に、右肩の上がつた四角な字で、

伜幸吉には何の罪も無之、飽までも成瀨屋を怨むは此冠兵衞に候。その證據として近々一家を鏖に仕る可く隨分要心堅固に被遊可く候　頓首

蝙蝠冠兵衞　亡靈

錢形平次殿

斯んな人を嘗めたことが書いてあるのです。

「八、こいつは大變だ」

平次は顏色を變へました。

「脅かしぢやありませんか、親分」

「いや、――脅かしなら宜いが、――幸吉を助けるつもりで、何を

やり出すか分らない」

「？」

「幸吉は擧げられてゐる。――成瀬屋に仇をするのが幸吉でないといふ證據は、幸吉が居ない時、なんか凄いことをやるに限るだらう」

「ヘエ――」

ガラツ八も次第に呑み込みます。

「ところが、下手人の素姓が今のところまるつ切り分らない。幸吉でないとすると――」

「矢つ張り冠兵衛の幽靈？」

「馬鹿な事を。幽靈が人を殺せる道理はない」

「でも、あの槍の折れを胸に打ち込んだのは大變な力ですぜ」

「大變な力だ。人間業ではむづかしい。が、矢つ張り二本足のある人間の仕業だ」

「そいつを搜し出すには、どうしたものでせう」

「成瀬屋の家の者を皆んな洗へ。主人夫婦を怨む者はないか、奉公人の身持、伜と娘の縁談、あのお町といふ娘のゐた大名屋敷、先代の成瀬屋の沒落した時の樣子、殺された番頭傳六の身持、身寄――」

「それから」

「そんな事で宜い。下つ引を存分に狩り出して。一日か二日の間に、手の屆くだけ調べ拔いてくれ。どんな事が持上がるかも知れない」

平次は殘る隈なく手を廻して、さて一人になつて靜かに考へました。かう相手の素姓が分らないと、幾通りも可能の假定を築き上げて、下手人の姿を描き出す外はありません。

いや、平次は不可能な事をさへも假定して、傳六を殺し得る相手を考へ出さうとして居るのです。

七

「さア、大變ツ、親分」

ガラツ八が飛込んで來たのは、それから三日目の朝でした。

「どうした、八」

今度ばかりは平次も、それを眞劍に受けて起ち上がりました。二三日憂鬱な考へに閉され乍ら、何時八五郎に脅かされるかも分らない心持で、此の報告を待つて居た平次だつたのです。

「成瀬屋の鏖殺しだ」

「何？」

「今朝の味噌汁でやられましたよ。主人もお神さんも、伜も娘も、ことに親類のお町などは九死一生の騷ぎだ」

「行つて見よう」

平次とガラツ八は、傳通院前まで飛んだことは言ふ迄もありません。

成瀬屋は死の淵に崩れ落ちるやうな恐ろしい混亂でした。店は閉めたまゝ、奉公人達は足音を忍ばせ、聲を殺してたゞウロウロするばかり。奥では主人夫婦、伜、娘、お町の五人、枕を並べて唸つてゐるのです。

一番重態なのは病弱なお町で、一番輕いのは主人の總右衞門、その口から平次はいろ〳〵の事を引き出しました。

中毒したのは奥で食事を攝つた五人だけ、奉公人達は皆けろりとして居りますが、その中でたつた一人、主人の弟の豊次郎が、何の異狀もないのが人目につきます。

「私は店の用事で朝の食事が遅れました。これから始めようとすると、皆んな苦しみ始めたんで、これはいけないと思つて止しましたよ」

さう聞けば何の變哲もありません。

集まつた醫者は三人。三人共口を揃へて毒は裏庭に今を盛りと咲いて居る烏冠の根を味噌汁へ摺り込んだものと分りましたが、誰がそんな事をしたのかとなると、まるで見當も付かないのです。

下女のお大は當面の責任者ですが、唯おろ〳〵するばかり、裏の方へなにか入つて來たので、味噌汁を仕掛けたまゝ一度見に行つたとは分りましたが、その間お勝手に入つて、鍋の中へ毒を仕込んだ者は誰かとなると、其處までは分りません。

裏庭へ行つて見ると、成程烏冠の花が美しく咲き亂れて居りますが、この根にそんな猛毒があることは、一般に知られて居ないことでもあり、澤山の烏冠の中にたつた一本根を痛められた樣子で枯れかゝつたのはありますが、それとても何時、誰がやつた事やら、奉公人達に訊ねても分る道理もない有樣です。

その日は騷ぎに暮れて、病人は醫者の手に任せたまゝ、平次は兎も角も引揚げました。金富町の留吉が、豊次郎を擧げさうにしましたが、『まだ早い』と目顏で合圖をして、辛くも思ひ止まらせたりしました。

神田の家へ歸つて來ると、八方に出した下つ引が、いろ〳〵の情報を集めて二三人待つて居ます。

「親分、あの主人の弟の豊次郎といふのは太い奴ですよ。——妾なんか圍つて、恐ろしい馬鹿を盡して居るが、店に居ると猫を被つて、神妙な顏をしてやがる。兄の金をどれだけ費ひ込んでゐるか分りませんよ」

——と一人。

「殺された傳六はひどい奴で、成瀨屋の先代に奉公人とも居候ともつかずに入り込み、人の良い先代を騙して、到頭身代限りの目に逢はせ、首まで縊らせた上、今の總右衞門を伴れ込んで、自分が采配を振つて居たさうですよ」

——と次の一人。

「あのお町といふ娘は感心な娘で、四五年前までさるお大名に奉公してゐたが讀み書きから武藝まで一と通り以上に出來る上、女乍ら弓が名譽で、總右衞門が引取ると言つた時、奥方が大層惜しがつたといふことですよ」

こんないろ〳〵の情報の中から、平次は自分に必要な材料をかき集めて居るのでした。

「親分」

最後に飛込んで來たのは八五郎です。

「なんだ、八」

「お町は今晩中保たないかも知れませんよ。町内の本道（内科醫）が、此の娘の病氣は大して重くはなかつた。本人が氣が弱くて一日の半分は床の上に居たが、それでも弱つた身體だから、毒にやられては一とたまりもない——といふんで」

「病氣は大して重くはないと言つたな」

「え、——それが、亂暴ぢやありませんか、今朝に限つて若い娘の癖に、味噌汁を二杯も替へて喰べたさうで」

「病人が、味噌汁を二杯？　よし、行かう」

「何處へ行くんで、親分」

「お町に逢つて置き度い。死なれちや大變だ」

宵も夜中もありません。平次とガラツ八は、その儘小石川陸尺町まで飛びました。

成瀬屋に着いた時は、平次が恐れたやうに、お町はもう頼み少ない姿で、醫者もすつかり匙を投げ、時の經つのばかり待つて居りました。

「ちよいと、お町に話し度いことがある。皆んな遠慮して貰ひ度いが――」

平次はお町の部屋から人拂ひをした上、隣の部屋に八五郎を頑張らせて、さて、病人の枕元に近づきました。

「お町、――望み通り、お前は助かるまい。かうなつては隱すことはない筈だ。皆んな話して、心持を輕くしてはどうだ」

「有難う御座います――親分さん――實は――」

「よし〳〵お前は苦しさうだ。俺が代つて懺悔してやらう。違つたところを、お前が訂すが宜い」

平次の言葉が優しく靜かに響くと、お町の熱を持つた眼は、大きくまたゝくのでした。痩せた頰に鼻の美しい影が落ちて、痛々しいが、此の上もなく靜寂な上品さです。

「お前は傳六を怨んだ。そして成瀬屋一家の者を怨んだ。お前の父親をむづかしい公事（訴訟）に引入れて沒落させ、首を縊るやうな目に逢はせたのは、傳六と總右衞門の惡企みだと知つてゐた」

「――」

お町の眼は又またゝきます。それはヂツと苦惱を堪へた、世にも痛々しい――が、美しい眼でした。

「お前は慈悲善根を賣物にしてゐる總右衞門に引取られるまゝ、此の家へ入り込んだ。父親の敵を討つつもりだつた。幸ひ總右衞門は、罪亡ぼしのつもりでお前によくしてくれるが、傳六はお前といふものを眼の敵にした。そこで先づ傳六を殺すことを考へ、二年前に此處で生捕られて刑死した泥棒の冠兵衞の名を假りて手紙を書き、あの小僧に店へ投げ込ませた。冠兵衞の名を借りたのは方便だが、お前は亡くなつた父親の敵を討つつもりだつたに相違あるまい」

「――」

「お前は病氣で弱つてゐるやうに見せかけたが、見かけほどは弱つてゐなかつた。お勝手の横に梯子のある日を見定めて、引窓を開け、あの晩は自分の部屋へ入つて寢てゐると見せかけて、宵のうちから店二階に入つて隱れてゐた。――お前の部屋など、夜になれば覗いて見る者もなかつたらう」

「――」

「夜中になると、豫て見定めて置いた長押の槍の折れを取つて、お前は弓で階下の傳六の胸に射込んだ。恐ろしい力で布團まで通つたのはその爲だ。――弓に弦を掛けるのがさぞ骨が折れたことだらうが、お前は死物狂ひでやつてのけた」

「――」

お町の眼は力なくまたゝきます。

「冠兵衞の僞手紙を、主人の手箱から盜ませ、代りに灰を入れたのは、お前がお芳を脅かしてさせたに相違あるまい。あれは見かけよりは賢くない娘だ」

「――」

「冠兵衞の伜の幸吉が縛られたと聞いて、お前はそれを助ける氣になつた。そして、成瀬屋の一家の者に思ひ知らせて自分も死ぬ氣に

なつた。鳥冠（とりかぶと）の根は豫（かね）て庭から掘つて用意して居た筈だ。下女のお大がお勝手をあけると、お前はそれを鍋（なべ）に投（はふ）り込み、自分が一番先に死ぬ氣で二杯も重ねた。——お町、まだ訊き度いことがある、あの小僧は誰だ、あの小僧は——」

錢形平次は驚きました。平次の言衆を靜かに聽き入つて居るうちに、お町の眼の色が次第に力が失せて顏には死の色がサツと刷（は）かれて居るではありませんか。平次の聲に驚いて多勢の者が飛込んで來ましたが、死んで行く娘の命をどうする事も出來ません。平次は少し引き下がつたまま、兩掌（りやうて）を合せて靜かに〳〵念佛を稱（とな）へて居りました。

窓から射し入る秋の曉（あかつき）の光りが、息を引き取つた娘の顏を、美しく神々しく照し出します。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物全集第十八巻　彦徳の面」同光社磯部書房
1953（昭和28）年10月20日発行
初出：「文藝讀物」文藝春秋社
1943（昭和18）年11月号
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2016年1月12日作成
2017年3月4日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

槍の折れ

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/